



地球環境研究者交流会議が開かれました

去る平成2年12月20日(木)、21日(金)の両日、国立環境研究所において地球環境センター主催による第1回地球環境研究者交流会議が開かれました。この会議は、研究分野、所属研究機関等を問わず広く地球環境研究に取り組み、あるいは今後取り組もうとしている研究者が一堂に会する機会とし、地球環境研究の交流促進を通じて地球環境研究の発展に寄与することを目的としたものです。第1日目は、地球環境研究に関する研究計画等の発表、第2日目は、パネル討論会が行われ、延べ約300名の参加がありました。研究計画発表者及びパネラーの方々のお名前とパネルディスカッションの概要とを報告いたします。(敬称略)

第1日：研究計画について

「オゾン層」関連分野

岩坂 泰信(名大太陽地球環境研究所)

「地球温暖化現象解明」関連分野

秋元 肇(国立環境研究所)

「地球温暖化影響・対策」関連分野

松尾 友矩(東京大)

「酸性雨」関連分野

戸塚 紘(東京農工大)

「海洋汚染」関連分野

平野 敏之(トキワ松学園女子短大)

「野生生物」、「熱帯林」関連分野

安野 正之(国立環境研究所)

「総合化」関連分野

西岡 秀三(国立環境研究所)

第2日：パネルディスカッション

「オゾン層」関連分野

富永 健(東京大)

「地球温暖化現象解明」関連分野

松野 太郎(東京大)

「地球温暖化影響・対策」関連分野

内嶋善兵衛(お茶の水女子大)

「酸性雨」関連分野

大喜多敏一(桜美林大)

「海洋汚染」関連分野

平野 敏之(トキワ松学園女子短大)

「野生生物」関連分野

小野 勇一(九州大)

「熱帯林」関連分野

依田恭二(大阪府立大)

「砂漠化」関連分野

門村 浩(東京都立大)

「総合化」関連分野

竹内 啓(東大先端科学技術センター)

パネルディスカッションにおいて、まず『地球システムモデル』については、温暖化影響・対策の立場から詳細な分解能の気候変化シナリオ作成の要請がありました。これに対しモデルの作成立場からは、多くの未解決な基礎問題が積み残されている現状ではあるが、最終的には変化予測を目標とするような(未完成)モデルを持つことの意義が述べられました。また、モデルを持つことによって、逆に問題点が明らかになる可能性も指摘されました。『研究と社会的要請との関連』については、基礎研究の重要性やある程度無駄かもしれない研究も支える必要性が指摘されました。その際、テーマ選択のために(例えば温暖化といった)「仮想敵」を持つのも一つのよい手段であるという意見がありました。また、日本においてフィールドサイエンスを行う若手研究者の減少が致命傷になるのではないかという危惧も述べられました。その他、省際化、国際協力、環境保全の意味等のテーマについて活発な討論が行われました。

(国立環境研究所 大気環境部 高敷=中込 縁)



下記の図書が「天気」編集委員会に寄贈されましたのでお知らせ致します。

- (1) 積算資料 雪寒対策特集 '90/'91 (財)経済調査会発行
 (2) 原見敬二著：「古事記」と気象 神戸新聞総合出版センター
 (編集委員会)

訂 正

巻・号	頁	行	誤	正
38. 1	46	左・2	+0.0004	-0.04
	47	右・21	科学研究所	科学技術研究所
	47	右・33	(h sinφ…	× (h sinφ…

編集後記：「現代用語の基礎知識」編集部が昨年末に選んだ「1990年日本新語・流行語大賞」の特別賞に「気象観測史上（はじめての・・・）」が選ばれたそうである。この賞は「1年の間に発生した様々な言葉の中で、軽妙に世相を衝いた表現とニュアンスをもって、広く大衆の目、口、耳をにぎわせた新語・流行語を選ぶとともに、その新語・流行語の発生により深くかかわった人物・団体を顕彰する」賞だそうである。

具体的に上記・・・に何が対応するのか明かでないが、察するところではその最たるものは、「温暖」や「暖かさ」であったのではないと思われる。昨年は地球温暖化が大問題として全球的に浸透した年でもあったからである。そこで昨年の暖かさが温暖化の兆しかどうかなどの話題が飛び交ったわけであるから、この大賞の存在理由も判らうというものである。

しかし、気象現象を仕事や学問の対象としている人々にとって、例えばこの温暖化問題について専門外の人からいろいろと問われたときに、どう答えるべきかについて、今までに比べて深刻さが格段と深まったことは否定できない。公の機関が公表したことまでは話が出来るとして、そこから一步踏み込んだこととなると、途誰に答えに詰まってしまうことが多いのではあるまいか。判らない面が実際に極めて多い中での答え方であるから困るわけである。そして真に深刻な問題は気象の専門家の答

え方が様々でかつ矛盾し、社会的に混乱を生むことになった場合であろう。

筆者は寡聞にして、深刻な混乱の事実のあるなしを知らないが、一国の政策決定はもちろん国際的協定・条約にいたるまでその混乱が影響する可能性がなきにしもあらずであると考えるのは行き過ぎであろうか。

「天気」は気象関係の専門誌である。「温暖化」に直接関係しないか、関係しても非常に間接的である多くの気象専門家を読者に持っている。そのような読者に対するある意味での指針となって、少なくともこの混乱の発生を起こさぬために貢献する使命があるのではないだろうか。

生意気なことを述べて恐縮ではあるが、温暖化関係の記事を読むときなどに筆者がいつも感ずることである。

(MS)

長い間「天気」の編集作業に献身的に努力された編集書記の長谷川初美さんが、都合で12月末で退職されました。本当に御苦労様でした。

1月からは新しく西沢美佐さんが書記として編集委員会に加わり、2月号の編集から全面的に担当されています。編集作業に慣れるまでは、皆様のより一層の御協力をお願い致します。

(編集委員長)